

協力体制をとり、児童の内面に目を向けて指導援助した事例

1 はじめに

この事例は、「いじめられっ子」の気持ちを理解し、支えるとともに、「いじめっ子」の行為の背景にあるものも理解し、学年の協力体制のもとに、適切な指導援助を工夫しながら実践したものです。「いじめっ子」「いじめられっ子」としての関係を改善していく過程で、学級全体としての望ましい人間関係を図っていったケースです。

2 問題把握とその概要

○ 担任は、Y男の母親から「ほっぺのところが赤く腫れあがっているのでどうしたのか聞いたのですが、転んだとしか言いません。背中にもつねられたような跡が無数にあります。いじめを受けている

のではないのでしょうか」という電話を受けた。早速家庭訪問することを告げた。

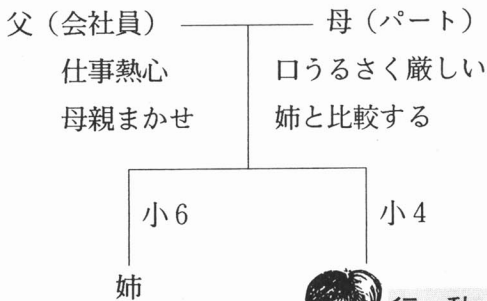
○ 電話を受け継いだ教頭先生から「興奮されていたようだ。学年主任にも話をしてから出掛けて下さい。いじめのようですし学年の中でよく協力して対処するといいですね」という助言を受けた。

○ 母親とY男から事情を聞いた。なかなか本人は話をしてくれなかったが、母親やY男からの話をまとめると、同じ学級で同じ登校班のN男からいじめを受けていたという。ひじで腹を打たれたり、顔に墨を付けられたり、カバンを持たされたり、お金を要求されたりしていたとのことであった。

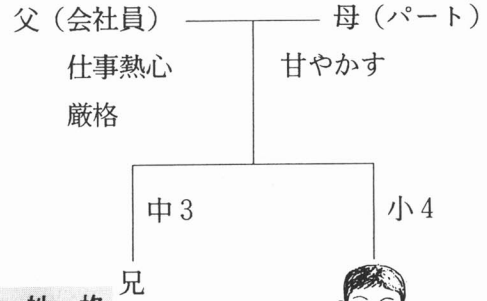
3 Y男とN男について

家庭状況

(Y男)



(N男)



行動及び性格

- やさしく気弱、主張できない
- 学習成績中位
- 行動が遅く、みんなより出遅れる
- 自信がない
- 友達が少ない

- 粗暴な方
- 学習成績下位
- 身勝手な行動をとり、班活動でのトラブルがある
- 友達が少ない
- 劣等意識あり